

## 高句麗・百濟・伽耶の建国神話と日本

### 瀬間正之

ご紹介いただきました瀬間と申します。よろしく願っています。

昨年度、私は大学を一年休暇で、春は釜山大に行き、秋はソウルの成均館大学という韓国で最も古い歴史を持つというか、一三九八年創立という、成均館が母体になっている、今はサムスンという企業が持っている大学に行っていました。そのときに植田さんと何度か飲みまくりました縁で、今日はここに立つことになったのだと思っておりません。

私の専門は上代文学や上代の言語ですから、国語学や国文学が専門です。大学時代から韓国の古代のことにも興味を持ちまして、大学に入って韓国語を履修していたわけで

すけれども、大学一年、二年までは韓国語という名前でしたが、大学三年になるとコリア語と名前が変わりました。現在でも上智大学ではコリア語という名前で開講しております。それはアジア問題研究会から韓国語とは何だというクレームがついた結果、先生がいろいろと考えてコリア語という変な言葉をつくったわけです。そのとき、私の韓国語の先生は日帝時代の人ですから日本語も韓国語もしゃべることができたわけですけれども、一般外国語としての韓国語は上智がかなり早い時期にその先生が始められたものです。

そのときに「NHKもコリア語という名前を使えばラジオ講座ができるのに」とおっしゃっていましたが、その後、

NHKは一〇数年おくれて「アンニョンハシムニカ・ハングル講座」という講座名にしましたね。その結果、わけのわからない「ハングル語」という言葉が生まれてしまいました。ハングルというのは文字のことで、日本語に訳せば平仮名語、カタカナ語ということです。

そういう変な言葉がNHKのせいでできてしまい、NHKの講師によっては「ハングル」という言葉を使わずに、「この言語に訳してください」とか「この言語で言ってください」というような言い方をします。ただ、多くの講師は平気で「ハングルで言ってください」という言い方をするようになってしまいましたので、今後、「ハングル」が朝鮮半島や中国の朝鮮族で話されている言語を指すようになっていってしまう可能性もあると思いますけれども、そういう功罪はNHKの講座に一因があると思います。

私はそのときから韓国語を勉強していましたが、先生に見放されて、「君は目だけでやりなさい」と言われました。耳と口がだめで、いまだにほとんど目だけでやっています。私はこれほど自分が韓国にいろいろ調べに行くとはい思わなかったもので、二〇〇八年に初めて長期滞在したときに会話を勉強し直しました。いまだに下手くそで、そういう意味で非常に不自由しています。

今日は高句麗・百済・伽耶の建国神話がどういうふうに

日本に伝わってきたかということを中心にお話したいと思います。最初に簡易年表を、これは書くのがなことですけれども、挙げておきました。最初に挙げた四〇〇年頃の高句麗広開土王伽耶進出が非常に重要で、伽耶（現在の金海市）に大成洞古墳があります。これは非常に大きな古墳ですけれども、四〇〇年以降、大成洞古墳のような大きな古墳は伽耶ではつくられなくなります。ということとは、この四〇〇年の高句麗好太王が伽耶に進出したことによって金官伽耶はかなり衰退してしまい、このとき大量の伽耶人がこの国に逃げてきたと考えられます。洛東江を伝わり、洛東江の河口から船で九州あたりに逃げてきたと考えられます。

このときに伝わったのが伽耶式土器、伽耶土器です。それが今日の日本で須恵器と呼ばれるあの土器のことです。この須恵器が今日最後にお話する三輪山型神話と密接にかかわってくると思います。その三輪山型神婚譚はこの四〇〇年のときに伽耶から逃げてきた人たちによって伝えられた神話ではないかと思っております。そういう意味でこの四〇〇〇年が非常に重要だと思えます。高句麗広開土王の進出というものです。

次の「0」「百済Ⅱ倭」漢字文化圏」の提唱」とあるところですが、二〇一〇年以来、私は「百済Ⅱ倭」漢字文化圏」ということを提唱しております。これは百済

と倭が同じ漢字文化圏にあった——いつまでかというところ、百済滅亡の後、百済から大量の亡命百済人がやってきます。その一世、二世の間ぐらゐまでは、百済と倭は同じ漢字文化圏にあったと考えております。それに関連する論文やシンポジウムなどを①⑥に掲げております。

①シンポジウム「上代における文化圏とは何か——文化圏から文学史の再構築へ」（大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻主催・水門の会共催、二〇一〇年一〇月三日）

②「〈百済Ⅱ倭〉漢字文化圏」「水門」二三（勉誠出版、二〇一一年七月）

③「古事記難語試解——〈百済Ⅱ倭〉漢字文化圏の観点から」「國學院雜誌」一一二巻一一号（二〇一一年一月）

④「第一篇 文字文化の基盤としての〈百済Ⅱ倭〉漢字文化圏」「記紀の表記と文字表現」（おうふう、二〇一五年二月）二三〜九一頁

⑤「日本文学における木簡研究成果」韓日（日韓）木簡ワークショップ発表論文集（ソウル大学校人文学研究院、二〇一六年三月）

⑥「高句麗・百済・新羅・倭における漢字文化受容」古代文学と隣接諸学シリーズNo.1 犬飼隆編『古代の文字文化』（竹林舎、二〇一七年七月）

二ページの「字体・用法の一致」ですが、前回の伊藤先生のお話にもありましたけれども、「棕」や「畠」「口（ア）（部の省画）」の字体は、百済の木簡では「ア」の字体が多いです。日本では藤原宮木簡が「ア」の字体で、平城宮になると片仮名の「マ」に近い字体に変わっていきます。木簡が出たときに片仮名の「ア」に近い字体で「部（ベ）」という字が使われていると七世紀のものであり、片仮名の「マ」の字体であらわれていると八世紀のものであるという区別ができるかと思えます。「ㄱ」月中、「ㄴ」之の用法、自国語の語順に漢字を並べるようなものは新羅にもありましたけれども、こういうものが百済から出た木簡と一致しているということです。

また、新羅は、固有名詞や新羅語の言語をあらわすのに訓主音従表記を使います。「文戸」・「赫戸」はリユールㄹ、アールㄱがつかます。これを「戸」字であらわしていて、これも前回の伊藤先生のお話にあったように、なぜこれがリユールㄹになるかという点、履修の「履」「リ」に通じる用法です。それを添記してクル、マヌルをあらわす。その次は「糸利」などの「利」「ㄹ」も、やはり末音添記で、これが新羅の方法です。

百済ではそういう用法は現在見られず、日本と同じ片仮名表記です。その中で注目されるのは、例えば字体も似ているということで百済の二九七号木簡の「□城下部對德疏

加歯」があつて「疎加歯」(ソカル)の「ル」は、稲荷山鉄剣の「獲加多支歯」(ワカタケル)の「ル」と同じ字体です。下に二九七号木簡の写真の「加歯」の部分だけを掲げておきましたけれども、そういうふうな文字の字体も一緒であるということです。

そういうことから、『古事記』、『日本書紀』の伝説でも「漢字は応神天皇の時代に百済から伝わった」とあり、『隋書』の倭国伝でも同じように、「漢字は仏經を求めた結果、百済から倭に伝えられた」とあります。そういうふうなこの時代、七〇〇年前後までは百済と倭は同じ漢字文化圏にあったと考えていいかと思ひます。

それが「日本」という国号ができるころになると百済はもうありませんし、百済は統一新羅に吸収されてしましますから、八世紀以降はそれがまた新羅から日本へというルートが今度はできてきます。例えば片仮名の起源になるものですか、特にお経の訓点は新羅と密接に関係があると考えられています。

ここまでが前置きです。本題は次の1『続日本紀』に記される百済建国神話です。『続日本紀』の前に『日本書紀』がありますけれども、『日本書紀』では高句麗が滅亡したときの様子が書かれていて、そのときに不思議な伝説を載せています。

天智七(六六八)年冬十月。大唐大將軍英公。打滅高

麗。々々仲牟王。初建國時。欲治千歲也。母夫人云。若善治國不可得也。但當有七百年之治也。今此國亡者。當在七百年之末也。

天智天皇七年の記事ですけれども、「大唐大將軍英公」——これは英国公李勣ですが、高句麗を討ち滅ぼします。高麗の「仲牟王」と「朱蒙」のことが出てきます。『日本書紀』では「朱蒙」の表記が「仲牟」となっています。初めて国を建てる時、千歳——千年治めようと思ったということです。

「母夫人(おりくく)」——これは『日本書紀』の古訓です。『日本書紀』の古訓は、『日本書紀』ができた翌年、養老年間からつけ始められたと考えられています。この古訓をつけた人たちというのは、言うまでもなく亡命百済人たちが朝鮮半島系の記事には訓をつけていたと考えられます。「夫人(おりくく)」と訓がつけられています。これは右側に小さな字で挙げたように、『周書』の百済伝では「妻を於陸と名づく」とあります。「夏言妃也」とあるわけですから、中国語では「妃(ひ)」と言うのに、百済語では妻のことを「於陸」と言っている。古訓の「おりくく」が、『周書』によって百済語であったことが確認されます。

このように『日本書紀』の古訓の中で、朝鮮半島関係記事にあらわれる不思議な言葉はあまり信憑性を持つてとらえられていなかったのですが、一九七五年でしたか、百済

の地である光州から『千字文』が出ました。従来、韓国にはたくさん『千字文』がありますけれども、新羅系の『千字文』しかないわけです。百済の地から出た『千字文』は特殊な漢字の読みが、従来にはない漢字の読みがあります。例えば「城」という言葉は『日本書紀』の古訓では「サシ」と読まれています。日本語のサ行音は、上代は<sup>サ</sup>か、「か、<sup>サ</sup>か、<sup>サ</sup>の四種類のどれか確定しておりません。ちや・ちい・ちゆ・ちえ・ちよだったり、しゃ・しい・しゆ・しえ・しよだったり、さ・し・す・せ・そだったりするわけです。

ところが光州から出た『千字文』には「城」のところの固有語として「チャス」と出ています。これは「チャシ」に非常に近い言葉です。そういうことによって、『日本書紀』に出てくる不思議な、日本語とは思えない言葉は亡命百済人たちが使っていた言語をそのまま使っていることが確認できるようにになりました。

その「母夫人（おりくく）」が言うには、「もし国を治めるとも、うべからじ」「ただし七〇〇年の治あらん」と言っています。「七〇〇年しかこの国を治めることはできない」と、朱蒙の母親が言うわけです。この朱蒙の母親は『三国史記』高句麗本紀によれば、「柳花夫人」と言われています。それがこう言ったということです。実際、六六八年に高句麗が滅亡したのは、まさに七〇〇年の後であったということが書かれています。これが日本で朱蒙のことが書かれた

最初です。「仲牟」という表記であったわけですから。

次の1『続日本紀』延暦八年（七八九）十二月附載「皇太后。其百濟遠祖都慕王者。河伯之女感日精而所生。」の記述ですけれども、「都慕王」——これは現在「トボオウ」と音読されています。漢音で「トボ」と読まれています。「都慕王は河伯の娘、日の精にめでて生めるところなり」と読むでしょうか。これは誰かという、桓武天皇の皇太后の高野新笠のことです。この高野新笠の先祖は百済から来た人であるということで、百済の遠祖として「都慕」という表記があらわれています。これは言うまでもなく、後ほど触れますけれども、多分、朱蒙のことだと思えます。これは東明だという説もあります。

二番目です。2延暦九年の記事です。「それ、百済の太祖都慕大王は、日の神霊を降して、扶余をおおい、国を開き、天帝籙を授けて、諸々の韓をあわせて王と名のれり」とあります。これは日の神が何か霊を天から下し、そして扶余全体を覆い、それでこの国が開国して王となったという記述です。

この2の記述はどこにあらわれるかというと、百済第一六代の辰斯王の子孫である津連真道、あるいは百済第三二代義慈王の子孫を名乗る百済王仁貞、百済王元信などがあげた上疎文中に見られる彼らの先祖の始祖伝承です。

1では、河伯の娘が日の精気に感応して生んだのが都慕

王、2では始祖都慕大王は日神が降霊したものとやっているわけです。こういうような百済の建国の神話が非常にダイジェスト的に描かれているのが『続日本紀』であるわけです。

この百済の神話は次の3の高句麗・百済建国神話というところに挙げました。これは恐らく私は『魏略』のほうが先ではないかと思いますが、まず①『論衡』から読んでいきたいと思います。

「北夷橐（タク）」は「橐（コウ）」の誤りではないかと考えられています。「橐（コウ）離国」です。ほかの資料では「橐（コウ）」あるいは「高麗」となっています。「侍婢有娠、王欲殺之。婢對曰「有氣大如鷄子」、從天而下、我故有娠。」ということですね。「鶏の卵のような物が天からおりてきて、それで私は妊娠した」と言っているわけです。こういう会話があり、王はそれを豚小屋や馬小屋の中に捨ててしまうわけですけれども、豚も馬もそれを殺さなかったので死ななかった。王はもしかしらこれは天子ではないかと疑っているわけです。そして「東明」と名づけたとあります。

この『論衡』の話は、百済では「東明」がよく出てきます。高句麗の話では「東明」という名前にはなかなか出会えません。このお話はダイジェスト版が『芸文類聚』にも出ています。この部分は三国志余伝注に引かれている『魏略』

の全文を採っている」というふうに、明治書院『新釈漢文大系六八論衡上』（山田勝美著）に出ています。山田勝美先生は私が大学二年のときに定年になった先生です。今考えるとそのときにこの意味を聞いておけばよかったと思いますけれども、もう遅いですね。亡くなられています。

『論衡』は一世紀にできているはずですが、山田勝美先生は後の『魏略』の文をとっていると言っているで、この部分は『魏略』をもとに書かれた、だから現在残る『論衡』のこの部分は一世紀のものではなく『魏略』以降のもの、三世紀以降のものだとお考えだったようです。

その次に『魏略』の文を引いておきましたけれども、ほぼ同じ文章です。これは『三国志』裴松之の注に引かれている文章です。

これについて韓国側では「三世紀に編纂された陳寿の『三国志』魏志・東夷伝扶余条と五世紀に編纂された『後漢書』東夷列伝扶余条にも載せられている。しかし、これらは上の資料6『論衡』（ここでは資料①）を転載したものであった可能性が濃厚であることで、扶余の建国神話は最も先に記録された『論衡』の資料が基盤になったと見ても大きく差し支えないようだ」（『召斗勇「百済建国神話の研究」日本の都慕神話を中心とした一考察」（韓民族語文学六〇、二〇一二年））としていて、韓国の歴史学者だと思えますけれども、キムファギョンさんは、やはり一世紀の『論

衡』が最初だという考え方で見られているようです。

いずれにせよ、天から何か卵の大きさをした気体のような物がおりてきて、それによって侍婢がはらんだ、そこから生まれたのが東明であるというお話が、この『論衡』や『魏略』系のお話であるわけです。

それに対して②③の金石文です。②はつい先年、発見されたばかりの集安高句麗碑ですけれども、これは朱蒙の表記が「鄒牟王」となっていて、河伯の孫となっています。現在はこれのほう为好太王碑よりも一代前の碑文ではないかという説が有力です。高句麗の最古級の金石文ですね。

③が有名な広開土大王碑ですけれども、ここでもやはり表記は同じで「鄒牟王」となっていて、母は河伯で、「卵を割きて世におろす」となっていて、ここで初めて卵生神話の要素が出てきます。卵から始祖が誕生するという話がここで生まれます。四一四年ですね。四〇〇年ぐらいになると高句麗の始祖は卵生神話である、卵から生まれるという神話になってきているわけです。

次は省略しまして五ページに進みます。参考に挙げた牟頭婁塚墓誌です。この牟頭婁塚の墓誌にも、「河伯之孫日月之子鄒牟」と出てきたり、「知河伯之孫日月之子所生之地」、来「北扶餘」——「河伯之孫日月之子の生まれたる地を知りて北扶余より来たる」だと思えますけれども、恐らく牟頭婁というのは高句麗好太王代前後の扶余出

身の、北扶余出身の高句麗官人だろうと考えられています。

上の写真が牟頭婁塚の写真で、下の写真が好太王陵の写真です。これは一昨年撮った物です。非常にきれいな紙に印刷していただいて、非常に鮮やかな写真になっているのでよかったです。これは九州大学名誉教授の西谷正先生が団長で行った高句麗旅行で撮りました。

その次が④『魏書』卷一百・列伝第八十八・高句麗です。ここでは高句麗の先祖は朱蒙となっていて、朱蒙の母は河伯の娘と、同じです。ここで点線部、「為日所照、引身避之、日影又遂。既而有孕、生一卵」——これは日光感精卵生神話と言います。日光感精神話と卵生神話が合体しているわけです。

⑤『隋書』卷八十一・列伝第四十六・東夷・高麗に載っている話もほぼ同じです。

以上をまとめますと、金石文では表記が「鄒牟」で母親が河伯の娘で卵生神話になっています。『魏書』や『隋書』の高句麗建国神話では、表記が「朱蒙」になっていて、日光感精・日光感応と卵生で母は水の神である河伯の娘ということになっています。それに対して最初の『論衡』や『魏略』に出ている扶余の建国神話では、主人公は「東明」になっていて日光感応型で母は侍婢です。母が召使いであるというのは、百濟の始祖説話と同じです。

鄒牟は、広開土王碑でも牟頭婁塚墓誌でも北扶余出身に



なっていることについて、扶余のこの話を高句麗がどうしてとったのかというお話については、李成市さんが、「その背景には、扶余支配の正当性の根拠を得ようとする高句麗の政治的意図があったのではないか」「李成市『梁書・高句麗伝と東明王伝説』『中国正史の基礎的研究』（早稲田大学出版部、一九八四年）」というお考えを持たれています。

七ページ、八ページに進みます。⑦は『三国史記』巻第十三・高句麗本紀・始祖東明聖王ですけれども、『三国史記』になって初めて高句麗の始祖に東明王の名前が出てきます。ここでは東明王と朱蒙と鄒牟が同一人物として描かれています。それまで中国側の資料には高句麗の始祖としては朱蒙しか出てきていません。河伯の娘の名前の柳花もここで初めてあらわれます。そして点線部に見られるように、「為日所照、引身避之、日影又遂而照之。因而有孕、生一卵」——日の光が射したので、体を避けると日の光がまた追ってきて射して、それではらんで一つの卵を産んだというお話になっています。

それまで中国側の史料や金石文でも鄒牟＝東明とは言っていないわけですけども、『三国史記』の時代になって初めて鄒牟＝東明、朱蒙＝東明という図式ができ上がります。

今度は百濟側のものです。⑧は『隋書』巻八十一・列伝第四十六・東夷の百濟伝です。これを見ると、やはり登場

人物は侍婢です。「百濟之先、出自高麗國」とあり、「其國王有二侍婢」とあり、やはり召使いです。そして妊娠したので王が殺そうとするという、このお話は①で挙げた『論衡』や『魏略』のお話に非常に近いです。そして、やはり同じように鶏の卵のような物がやってきて、それに感応して妊娠したということで、これは『論衡』などとそっくりです。「名づけて東明という」ところも同じです。高句麗系のお話は鄒牟になっていますが、百濟は最初から『論衡』型をとって東明になっています。

次の文章を読みます。これは先ほどのキムフアギョンさんの論文を訳した物です。「召斗邪」「百濟建国神話の研究——日本の都慕神話を中心とした一考察」（韓民族語文学六〇、二〇一二年）」

「とにかくこの東明神話は中国資料に残っている百濟建国神話とはかなり類似の内容になっていて、後者が前者と同じ系統の物であることをあらわしている。したがって日本の子孫たちに伝え受け継がれた百濟の建国神話も、中国のそれと同じで『論衡』に載せられた扶余国の東明神話と同じ系統の伝承だったと見ても構わないだろう。」

⑧『隋書』百濟伝では、「一侍妃に卵のような物が下って妊娠して産んだ東明の子孫の建てた国が百濟」。⑤『隋書』高句麗伝では、水神の娘河伯が日光感応によって卵を産み、その卵を孵して出た朱蒙が建てた国が高句麗」ということ



で非常に似ていますが、名前は東明と朱蒙と異なります。

キムファギョンさんは、「このような差異は、編者が同じ史書中に高句麗条と百済条にその建国神話を同時に載せながら、意図的に区分を試みた可能性もある」としています。

また続けて「ところが、百済建国神話の資料中から日光感応や卵生モチーフを持ったものが発見されていない。このような事実はもとより百済と高句麗の建国神話が他の伝承であったことをあらわすものではないかと思う」と言っています。

百済では歴代王の「二年春正月」に「謁始祖東明廟」の儀礼がありました。これは『三国史記』百済本紀に十例ほど出ていると思います。——したがって百済の建国の始祖は東明であり、鄒牟ではないということになります。

高句麗神話になぜ卵生の要素が加わったかということとは、古くは三品彰英さんが卵生神話は南方系であると言っていて、それが一般的でしたが、キムファギョンさんは、「現在、カムチャツカ半島に暮らしているコリーヤク族が卵生神話を持っていて、またこれらが満洲地域一帯に生活していたという点を考慮して、扶余族が宋花崗流域の農安と長春地域付近から吉林地域一帯へ移住しながらこれらと接触を持ったという仮説を呈示したことがある」としています。これは南方ではなくコリーヤク族が卵生神話を持っていて、それが高句麗の卵生神話に入ってきたのではないかと

いう新説です。

⑨は『北史』卷九十四・列伝第八十二の百済条ですけれども、これもやはり天から何か卵のような気がおりてきて妊娠したという話で、卵生の話はありません。

⑩はまた『三国史記』卷第二十三・百済本紀第一です。ここでもやはり、「百済始祖温祚王、其父、鄒牟」とありますけれども、「或云朱蒙」とあります。中国側の史料では百済の始祖は東明でしたが、『三国史記』になると、またここでも鄒牟と東明が同一であるように書かれるようになってきています。このように、中国史料は東明、『三国史記』で初めて「鄒牟、或云朱蒙」と出てくるわけです。どうも東明と鄒牟を合体させたのは『三国史記』の編者のしわざではないかとも考えられてきます。

この神話はどのように日本に伝わってきたかということですが、次の九ページ、一〇ページから『日本書紀』や『懷風藻』、『令集解』などの記述を挙げましたけれども、これは読まずに一〇ページからです。aの天智四(六六五)年二月の記事では、四〇〇名の亡命百済人がいて、cの天智八(六六九)年は歳の記事では七〇〇名の亡命百済人と書いてあります。

bの天智五(六六六)年は冬の記事が非常に重要で、「白村江の敗戦から三年間にわたり、僧・俗二〇〇〇余人の百済人に官食を与えていた」というのです。今の安倍政権で

は二〇〇〇人の人が逃げてきて、それに三年間も政府が食事を与えるということはあり得ません。なぜこういうことがあったかというと、それはやはり相当のおみやげを持ってきたということではないでしょうか。相当の文化や宝物を持ってきていないと、こういうことはあり得ないと思います。

ここに「僧・俗」とありますけれども、『日本書紀』の本文では「不<sup>レ</sup>擇<sup>二</sup>緇素<sup>一</sup>（ほうしとしろきぬを選ばず）」と出てきます。わざわざ一般人とお坊さんの両方を挙げたということは、やはり相当数の亡命百済僧が存在し、これ以降の日本の仏教政策にも大きな影響を与えていると思います。『日本書紀』では慧聰を初め百済からの渡来僧は十数名を数えられます。

『続日本紀』では「百済沙門道藏は、寔に惟れ法門の領袖にして、釈道の棟梁なり」と書かれており、仏教界の中心的人物が道藏であったとされています。七二一年に年八〇才を逾えていたとすれば、六四一年以前の生まれであるから、bの記事の「僧・俗二〇〇〇余人の一人であった」可能性も出てきます。二〇〇〇人以上の百済人がいたことは確かです。しかも政府が食を与えていた。

dの天智十（六七二）年正月の記事は、近江朝廷の主要な官職に充てられた五〇人以上の百済人を挙げています。これは最初の沙宅紹明は法務大臣、鬼室集斯が文部大臣で

す。みんな大友皇子の側近で、家庭教師的な存在です。

eは『懷風藻』大友皇子伝で、百済人の漢字文化が近江朝の中心にあったことが、これによってわかります。

fの天武二（六七三）年間六月の記事は沙宅紹明の記事です。「大左平」は百済の最高位で、「小紫」は後の従三位ですから、沙宅紹明に従三位を与えたという記事です。

一一ページにいきまして、g天武天皇十（六八一）年八月の記事は、帰化後十年、調税免除していたものを、さらにとともに帰化した子孫についても課税を免除するという、百済からの亡命人は税金免除です。

h『令集解』卷第十三賦役令「古記」所引太政官符・i延暦十六（七九八）年五月廿八日格・j養老元（七一七）年十一月は、高句麗・百済滅亡時に帰化した者は一生課税を免除するという、これもまたすごい記事です。そういうふう到高句麗・百済滅亡時にこの国にやってきた方々は非常に優遇されていたということです。

⑫は『新撰姓氏録』です。

a 左京 諸蕃 百済 和朝臣 出自百済国都慕王十八世

孫武寧王也

b 左京 諸蕃 百済 百済朝臣 出自百済国都慕王卅世孫

惠王也

c 左京 諸蕃 百済 百済公 出自百済国都慕王廿四世

孫汶淵王也

d 右京 諸蕃・百濟 菅野朝臣 出自百濟国都慕王十世孫  
貴首王也

e 右京 諸蕃 百濟・百濟伎 出自百濟国都慕王孫德佐  
王也

f 右京 諸蕃 百濟 不破連 出自百濟国都慕王之後毗  
有王也

都慕王を先祖とする a・f の六氏族が存在していた、つまり八世紀ごろの日本には自分たちが百濟の始祖都慕王の子孫であると称する人々がこれだけ存在していたということとす。

これまでの小結として、

鄒牟 集安高句麗碑・広開土王碑文・金石文・『三國史記』  
高句麗本紀・百濟本紀など

東明 『論衡』卷二・古驗篇・北夷・高麗・『後漢書』扶余伝・  
『梁書』高句麗・『隋書』百濟・『北史』百濟など

朱蒙 『魏書』高句麗・『周書』高麗・『隋書』高麗・『北  
史』高句麗・『三國史記』高句麗本紀・百濟本紀（或  
云）・『三國遺事』高句麗など

都慕 『続日本紀』五五 吳音ツモ 漢音トボ  
仲牟 『日本書紀』五五 吳音ヂュウム 漢音チュウ

ボウ

「鄒牟」と書かれているのが、集安高句麗碑・広開土王  
碑文・金石文・『三國史記』高句麗本紀・百濟本紀です。「東

明」と書かれているのが『論衡』・『後漢書』・『梁書』など  
です。「朱蒙」と書かれているのが、『魏書』・『周書』・『隋書』  
等々です。「都慕」と書かれているのが、『続日本紀』です。  
「仲牟」と書かれているのが、『日本書紀』です。これは全  
部、同一人物であるかのように思えます。

現代の韓国では「都慕」を韓国漢字音で「トモ」と発音  
し、むしろ「東明（トンミョン）」と同一視する説があり  
ます。これが先ほどから引用しているキムファギョンさん  
の論文や、次のキムスミさんは、去年光州に行ったときに  
韓国古代史学会例会でたまたま聞くことができた発表です  
けれども、この方も同じように「都慕（トモ）」は「東明」  
のことだとされています。「召令叫」「百濟始祖伝承の様相  
と変化原因」（於全南大学、二〇一五年一月一日）韓  
国古代史学会例会発表資料」近年の韓国の説です。

ところが、どう考えても「朱蒙」ですが、この（へ）印は、  
一二ページ一行目の「漢字音から見た高句麗語の音韻大系」  
という本で李丞宰さんがされている音価推定が（へ）の中  
のハンゲルです。普通の（一）の中が、その上にある金武  
林さんの「古代国語漢字音」の音価推定です。

朱蒙字号（令）（豆）

鄒牟字号（令）（豆）（豆）（豆）（豆）（金思燁推定  
古代語ミロ↓ミ）

「金武林『古代国語漢字音』（韓国文化社）二〇一五年」

〈李承宰「漢字音から見た高句麗語の音韻体系」(일조각) 二〇一六年〉

一応、古代語の音価推定として「朱蒙」は「チュウモ」だったたり、「鄒牟」は「チュモ」であつたりします。漢字音からは「チュウモ」、「チュモ」という発音であつたと推定されます。あるいは金思燦さんは、推定古代語として「朱蒙」は「즈르↓슴 チュム」であつたと、それはもともと「チュム」であつたということを述べられています。

この「チュム」・「チュモ」という発音は、当時の日本語にはキャ・キュ・キョ、チャ・チュ・チョという拗音がないのです。もしこの「チュモ」・「チュム」という発音であつた場合、その「チュ」という発音自体が当時の日本語に存在しないわけですから、それを「都」であらわしたのでないか。「都」の呉音が「ツ」、漢音は「ト」です。

逆に現代韓国語には「ツ」の発音がありませんので、現代韓国人が日本語を習うと、この「ツ」の発音がなかなかできません。「チュ」と言つたり「ス」と言つたりしているのではないかと思います。

したがって、この「チュ」の発音は当時の日本語にはなく、それをあらわすのに「ツ」を使つたのではないかということです。その一つの例として参考に「州」を挙げておきました。これは漢字音は「チュ」ですけれども、「ツ」や「フ」は日本で最も早くつくられた仮名です。藤原宮の木簡にも

出てきますから、七世紀には既に存在した仮名です。この「フ」の字体にはいろいろな説があり、「川」説もあります。なぜ「川」を「フ」と読むのでしょうか。私はこの「州」こそが「フ」、「ツ」の字源であると考えています。

それは日本の金<sub>石</sub>文にも「州利」という表記があります。「何々ツリ」と読まざるを得ない、<sub>石</sub>は「今」か「命」かわからないですけれども、この字は不明で、「メツリ」と読む人もいるし「コンツリ」と読む人もいますけれども、この「州」の字体こそが「フ」や「ツ」の字源である、もとの字体はこれであつて、これを崩したものが「フ」や「ツ」であつたと考えています。したがって当時、日本語は「チュ」の発音がありませんから、「都(ツ)」であらわさざるを得なかったのではないかということです。これで「都慕(チュモ)」という発音になつたのではないかと思います。発音がなかったけれども、この字で書いたら「チュモ」と。

恐らく現代韓国人も「ツモ」を発音すると「ツモ」とは発音できずに、むしろ「チュモ」に近い発音になるのではないかと思います。

以上のことから、表記から見て『続日本紀』都慕神話は文献に依拠して伝えられたものではなく、子孫たちの間に代々受け継がれてきた始祖神話を文字化した百済の建国神話と考えられます。「チュモン」という発音を文字化したものが「都慕」であり、それが『続日本紀』に残されている

る百済の建国神話ではないかと思っております。

次に附録として挙げたのは、高句麗の「泉蓋蘇文」は『日本書紀』では「伊梨柯須彌（イリカスミ）」と出てきます。これもいろいろな説がありますけれども、「金」が「蘇」に当たるなど、音訓入りまじった表記がそれぞれ各国でされているという例を挙げておきました。

①の皇極元（六四二）年二月の記事は、「泉蓋蘇文（伊梨柯須彌）」が国王を殺したという記事です。

②の皇極元（六四二）年二月の記事は非常に注目すべき記事です。中国側の史料にも高句麗側の史料にも出ていないことが『日本書紀』に出ています。それは「泉蓋蘇文」の遺言です。

なぜ他国の大臣の遺言まで『日本書紀』は記しているのか、これはすごいことだと私は思います。『日本書紀』では「泉蓋蘇文」は「蓋金」という表記になっています。これは「金」の固有語が「ソ」（蘇）だと思われまますので、そういう表記になっているのだと思います。

その次に『旧唐書』巻五・本紀第五・高宗下を挙げておきましたが、『旧唐書』には「泉蓋蘇文」が死んだということと、その子供たちの仲が悪かったということしか書かれていません。仲が悪かったということを踏まえた遺言が次の文です。

高麗大臣蓋金終於其國。遺言於兒等曰。「汝等兄

弟。和如魚水。勿爭爵位。若不如是。必爲隣咲  
（汝等兄弟、和はむこと魚と水の如くして、爵位を争うこと勿れ。若し是の如くにあらずは、必ず隣に咲はれむ）

このように「兄弟たち仲よくしろ、息子たちよ、兄弟争いをするな」という遺言まで載せています。この遺言が本当にあつたのかどうかわかりません。しかも、全部、四字句で構成されていますので、何か作爲的なものも感じますが、けれども、こういうところまで『日本書紀』が他国の大臣の遺言を載せるという不思議なところですので、紹介いたしました。

次も附録ですけれども、七一六年、埼玉県に高麗郡（現在は日高市）をつくったときの『続日本紀』の記事です。上の写真は高句麗旅行のときに私が撮った、高句麗の最初の都「五女山」山城です。下は群馬県と長野県の県境にある「荒船山」です。五女山を見た途端、なぜこんなにそっくりな山があるのか、と私は息を飲みました。本当にそっくりです。この二月に韓国木簡学会の人が群馬県の上野三碑などを見にきたときにバスの車窓から見える荒船山を紹介すると、やはりみんな息を飲んでいました。五女山だと思っているわけですね。

『続日本紀』靈龜二（七一〇）年五月十六日。以駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野七國高麗人千七百九十九人、



五女山（上）と荒船山（下）

遷于武藏國、始置高麗郡焉。」

ここに書きましたように、六六〇年の百濟滅亡、六六三年の白村江の敗戦、六六八年の高句麗滅亡と、百濟人はもちろんこの時代には大量の高句麗人も渡来していたはずです。高麗王若光を初め高句麗移民がもし荒船山を目にするものがあつたらと考えると、これは何か歴史小説が書けそうです。ただ、残念ながら日高市からは荒船山は見えません。もう少し埼玉県の北部まで行かないと見えないと思いますけれども、これを見ていたらやはり相当郷愁に駆られるというか、ここが五女山だと思えます。これも余談の一つです。

次が伽耶建国神話と天孫降臨神話です。ここに『三国史記』や『三国遺事』の一般的な概説を書いておきました。高句麗・百濟・新羅の神話を載せるものに編纂の時代は下るが、僧一然撰の『三国遺事』がある。勅撰の『三国史記』が中国正史の紀伝体に倣って、新羅・高句麗・百濟、三国の史実を本紀・年表・志・列伝に分類して記述し、中国的思想と漢学的嗜好に終始し、「詞臣不載」（三国の言語伝承や歌謡などは掲載しない）の立場をとったために、三国時代の言語が残されていたとしても、全ては漢訳されたり、また多くの三国時代の史料も改竄されてしまったことを受け、その弊害を是正する意図を以て正史に埋もれている雑



多な事実を採録したものです。仏教関係の記事を豊富に盛り込んでいること、一四首に過ぎないが、『万葉集』と同じように漢字を新羅語の表記に用いた郷歌という古代歌謡を載せていることに特色があります。

三国時代の史料としては、高句麗には「留記」がありました。それが「新集」五卷になったとか、百濟は三七五年に「百濟書記」があつたとか、新羅では五四五年に国史があつたとされています。特に百濟系の史料は、今日『日本書紀』にも「百濟本紀」・「百濟記」・「百濟新撰」の三書が引用されています。この三書は、我が国において渡来系百濟人の手によつてなつたと考えられます。それは日本のことを全部「貴国」と書いてあります。本当に百濟で書いたとしたら、手紙文以外で日本のことを「貴国」とは使わないはずで、ところが一般の文書の中で、この百濟三書は日本のことを「貴国」と書いているので、日本で書かれたことは確かだと思います。ただ、こういう物があるわけですから、百濟でも早くから史料の編纂がされていたことは裏づけられます。したがって『三国遺事』の成立はおくれますが、『三国遺事』に記述される神話は記紀に匹敵する時代までさかのぼることができる可能性はあると考えられます。

①に挙げた「駕洛国記」は、「大康年間」と出ています。大康年間は一〇七五―一〇八五年ですから、一一世紀です。

「一一世紀に書かれたものを今、略してこれを述べる」とあります。これほどこまめさかのぼることができるかわからないわけですが、これが有名な首露王の降臨神話です。さつと読みます。

「開闢之後。此地未<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>邦国之号<sup>一</sup>。亦無<sup>二</sup>君臣之称<sup>一</sup>。越有<sup>二</sup>我刀干・汝刀干・彼刀干・五刀干・留水干・留天干・神天干・五天干・神鬼神干等九千者<sup>一</sup>。是酋長。領<sup>二</sup>總百姓。凡一百戸。七万五千人<sup>一</sup>。(略) 属<sup>二</sup>後漢建世祖光武帝十八年(紀元四十二年)壬寅三月禊浴之日<sup>一</sup>。所<sup>二</sup>居北亀旨<sup>一</sup>——この「亀旨(クジ)」がかねてから日本の天孫降臨の地である久士布流多氣(くじふるだけ)の「久士」と音が一致するということが注目されています。「若<sup>二</sup>十朋伏之状<sup>一</sup>。故云也」——これは亀が伏したような姿をしていたので亀旨という、という注がつけられています。

「而発<sup>二</sup>其音<sup>一</sup>曰<sup>二</sup>此有<sup>レ</sup>人否<sup>一</sup>。九干等云<sup>二</sup>吾徒在<sup>一</sup>。又曰<sup>二</sup>吾所<sup>二</sup>在為何<sup>一</sup>。对云<sup>二</sup>亀旨也<sup>一</sup>。又曰<sup>二</sup>皇天所<sup>二</sup>以命<sup>一</sup>我者。御<sup>二</sup>是处<sup>一</sup>。惟<sup>二</sup>新家邦<sup>一</sup>。(略) 爾等須<sup>二</sup>掘<sup>一</sup>峯頂撮<sup>二</sup>土<sup>一</sup>。歌之云<sup>二</sup>——何か異常な声がして人々が集まると、人の姿は見えないけれども、声だけで「ここに人がいるかどうか」と言つて、九干たちは「我等がいます」と。「ここはどこか」と聞かれて「亀旨です」と答えたというのです。私は天の命令によつてここを治めて新しい国をつくるためにここにおりてきた、おまえたちはこの土をとつて、





こう歌いなさいと言います。

「亀何亀何。首其現也。若不現也。燐灼而喫也」——亀よ、亀よ、その首をあらわせ。もしあらわさなければ焼いて食

べてしまふぞ、というような内容です。「でんでんむしむしかたつむり」の歌に少し似ていますけれども、この歌は韓国最初の歌謡ということで、小学生も知っている歌です。韓国語に訳されて歌っていますし、金海博物館に行くところの歌がハングルで書かれて大きく掲げられています。

「唯紫繩自天垂而着地。尋繩之下。乃見紅幅裏金合子。開而視之。有黃金卵六、圓如日者。」——それから幾ばくもなくして天から紫色の繩がおりてきて地に着いた、ということです。繩のもとを尋ねると、紅幅に包まれた金合子があり、その金合子をあけてみると黄金の卵が六つ入っていた、ということです。

この黄金の卵六つがかえってどんどん成長し、そのうちの一人が首露王になり、残りの五つが五伽耶の王になったということ、上の写真をご覧ください。

前はこの卵は亀旨峰に置いてありましたが、今は首露王陵横の池に移されました。私は最初亀旨峰はどこかと思つて国立金海博物館の館長に聞いたところ、あれだよ、と裏の山を指されたのがっかりしました。高千穂のようなところを想像してしまいました。この真ん中の写真は大成洞古墳から亀旨峰を見たところですが、隣のビルよりも低いぐらいの山が亀旨峰です。後ろの大きな山ではなく、ちようど真ん中にある丘が亀旨峰です。ここにおりてきたとなると、日本の天孫降臨の方は壮大ですね。

二〇〇八年の秋にこの亀旨峰に行ったとき、紫の縄が空からおりてきたのです。左の写真を見てください。大成洞古墳から首露王陵に行くときにお祭りをしていて、こういう光景、まさに紫の縄がおりてきたのです。私は驚きましたが、これはお祭りで連風を揚げていたのです。私にとってこれは「駕洛国記」そのもののように見えて、私を韓国はこのように迎えてくれたのだと思って感動しました。本当にこれは感動的で、首露王そのもののように思いました。



次の文章を読みます。

「嬰兒（ニニギ）が真床覆衾に包まれて降臨する点〔日本書紀本書・第四の一書・第六の一書〕と、黄金の卵の入った金の合子が紅幅に包まれて降臨する点が酷似すること、また降臨地（久士布流多氣）〔古事記〕「クジフルの峯」〔日本書紀第一の一書〕・「クジヒの高千穂峯」〔日本書紀第二の一書〕・「クジヒの二上峯」〔日本書紀第四の一書〕と「亀旨引ス Kuni」の音が類似することについては、既に多く指摘されるところであるが、記紀の天孫降臨神話と「駕洛国記」の大きな相違点は、後者が降臨者を迎える側（九千、在地の人の立場から記述されているのに対して、記紀神話では降臨者側の立場、高天原からの立場で記述されている」。すなわち、降臨者を迎えた九千という在地の首長がこの神話の伝承者であるかのように記述されるのが伽耶の建国神話であるのに対して、記紀神話では天孫瓊瓊杵尊を降臨させる側である天照大神や高皇産靈神の側からの伝承であるように記述されているわけです。

別表をごらんください。『古事記』、『日本書紀』と出雲国造神賀詞（かむよごと）という祝詞です。出雲国造が交代するときに大和朝廷で奏上した祝詞です。『紀0』は『日本書紀』の本書、「紀6」は『日本書紀』一書の第六、「紀4」は『日本書紀』の第四の一書です。〔記〕は『古事記』、『紀1』は『日本書紀』の一書の第一です。

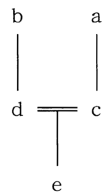
「国譲り」はちよつと置いて、下の「天孫降臨」のときで、

司令神が高皇産霊神であつたり、天照大神であつたり、高木神は高皇産霊神の別名です。降臨神はみんな瓊杵尊ですけれども、『古事記』のところを見ると、最初は「正勝吾勝速日天忍穗耳命」、後に「天津日高日子番能邇邇藝命」です。これは『日本書紀』の第一章でも「正哉吾勝速日天忍穗耳尊」、後に「天津彦彦火瓊杵尊」ということです。

降臨神の容姿も全部書きましたけれども、真床覆衾に包まれた嬰兒ですから赤ん坊です。あるいは虚空で出誕した嬰兒とか、降誕間際に誕生して容姿の記述がないということとで、瓊杵尊は赤ん坊です。瓊杵尊は赤ん坊であるというの、やはり「駕洛国記」は赤ん坊以前ですね、卵であるということとの関連性があると思います。

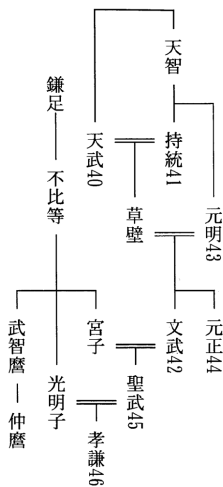
六個の卵が首露王と伽耶の王になったというのは、瓊杵尊十五伴神で降りてくるわけです。これは『古事記』を見ても『日本書紀』の第一の一書を見ても、五部神、天兒屋命、中臣氏の先祖ですね。これは重要です。

系譜 a・b・c・d・e のところで、a・b・c・d・e それぞれに入るものの『古事記』、『日本書紀』での表記を挙げています。結局 a に入るのは天照大神、b に入るものは高皇産霊尊、c に入るのは天忍穗耳尊、d に入るのは秋津師比売命、e に入るのは瓊杵尊ということです。したがって天照大神や高皇産霊神にとつては孫が降臨すると



これが記紀編纂時の皇室系図を見ると、四一代持統天皇の孫の四二代文武天皇が即位する。四三代元明天皇の孫の四五代聖武天皇が即位する、間に四四代元正を挟みますけれども、これは元明天皇が疲れて、娘にちよつとバトンを渡して聖武の成長を待ったわけです。持統天皇も幼い文武の成長を待ってから文武を天皇にするわけです。これは天照大神から瓊杵尊へというのと同じように、祖母から孫へというのが二回、記紀編纂時の皇室系図では繰り返されるわけです。

#### 編纂時皇室系譜



このことを最初に言ったのが上山春平『神々の大系』中公新書、一九七二年」さんですけれども、最近では大山誠一さんが『天孫降臨の夢』(NHKブックス、二〇〇九年)や、つい最近出た『神話と天皇』(平凡社、二〇一七年)などの本でもこれを繰り返して、大山さんのおもしろさは伝統から文武への皇位継承をプロジェクトYと名づけています。元明から聖武への皇位継承をプロジェクトZと名づけて説明しています。これは『天孫降臨の夢』でも『神話と天皇』でも同じです。

その中で大山さんはこの「駕洛国記」をどうして知ったかという、天智七年に新羅から数年ぶりに金東厳という使いが来るわけです。この使いに対して藤原鎌足が会うわけですが、鎌足は金東厳にことづけて、新羅の將軍である金庾信に船を送っています。したがって鎌足と金庾信はかなり親交があったと考えられます。この金庾信は首露王から数えると一二代目の子孫になります。金庾信と鎌足の関係から、その子供の不比等、このプロジェクトX・プロジェクトY・プロジェクトZの遂行者は言うまでもなく藤原不比等であるというのが大山誠一説ですけれども、それは系譜の不比等のところを見てください。

不比等のところを見ると、不比等を高皇產靈神に当てる、と聖武が瓊瓊杵尊になります。不比等が高皇產靈神であると、その娘、藤原宮子がdの万幡姫になり、eに当たるの

が聖武になるわけです。不比等は鎌足と新羅の金庾信、三國を統一した大將軍である金庾信との関係からこの「駕洛国記」を知っていて、不比等もそれを利用したのだというあまりにも生臭いふうに大山さんはまとめています。私はこれは既に須恵器Ⅱ伽耶式土器を伝えた人たちが持っているのではないかと思っています。その話を最後にしてここは終わります。

一六ページの三輪山型神婚譚と須恵器については、三輪山型神婚譚というのは、三輪の大物主が蛇になって結婚するお話です。『日本書紀』を挙げましたが、これは全部訓読文をつけてあります。『日本書紀』は主人公が大きく違います。その次に『万葉集注釈』が引いている「土佐国風土記逸文」が引いている「多氏古事記」というなぞの本がありますけれども、ここでは「針」を衣につけて、その針が三輪残ったので「三輪」だという地名起源になっています。

正体不明の男が毎晩やってきますが、誰だかわからないということでは正体を知るために衣に針をつけておく、糸をずっとたどって行って、残ったのが三輪だったので三輪村というのがこのお話です。『古事記』のお話が最も完成度が高いので、『古事記』の話を読んでおきます。

此の、意富多、泥古と謂ふ人を、神の子と知る所以は、上に云へる活玉依毘売、其の容姿端正しくありき。

是に丈夫有り。其の形姿威儀、時に比無し。夜半の時に倏忽到来る。故、相感でて、共婚ひして共住める間、未だ幾時もあらねば、其の美人妊身みぬ。余くして父母其の美人妊身める事を恠しびて、其の女を問ひて曰ひしく「汝は自ら妊みぬ。夫无きに何由か妊身める。」答へ曰ひしく、「麗美しき丈夫有り。其の姓名も知らず。夕毎に到来りて共住める間に、自然懷妊みぬ。」

是を以て其の父母、其の人を知らむと欲ひて、其の女に誨へて曰しく、「赤土を床の間に散らし、閑蘇の紡麻を針に貫き、其の衣の裾に刺せ。」故、教の如くして旦時に見れば、針著けし麻は、戸の鉤穴より控き通りに出でて、唯遺れる麻は三勾のみにありき。——鉤穴を糸が通っていったというのです。そういうことができるのは蛇でしょうね。

余くして即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸の従に尋ね行けば、美和山に至りて神の社に留まりき。故、其の神の子とは知りぬ。故、其の麻の三勾遺りしに困りて、基地を名づけて美和と謂ふなり。——三輪山型伝説というお話です。

『粟鹿大明神元記』は、『古事記』よりも古い本だとこの本自体は言っています。もっと後でしようけれども、『粟鹿大明神元記』と『新撰姓氏録』の話はそっくりですが、ほぼ似ています。『先代旧事本紀』もやはり『新撰姓氏録』

と似ていますかね。同じころの物ではないでしょうか。部分的には『粟鹿大明神元記』は古い部分も残っていますけれども、新しい部分もあります。

『先代旧事本紀』になると、新しい小道具として「天羽車大鷲」に大己貴神が乗っていることになっています。「鉤穴」も『古事記』からです。『古事記』以前は鉤穴を糸が通るといふ要素はなく、『古事記』では二一ページにある「経律異相」からヒントを得て「鉤穴を通る」としたのでないかと思っています。

これと似た話が『三国遺事』の「後百済」のお話にあります。後百済を建国した甄萱という人も、同じような神話が出ています。ただし、これは王になったのが、三行目「至景福元年壬子」称王とありますが、景福元年は八九二年です。その行の最後の「清泰元年」は九三四年です。ということで、『古事記』、『日本書紀』より大分おくれます。訳を読みます。

光州の北村に住む金持ちの家に美しい娘がいた。娘は父に「いつも紫の衣を着た男が寝室にやってきて共寝をしています」と言うと、父は娘に「長い糸を針に通してその男の衣に刺しておきなさい」と言う——まるで『古事記』を見たかのような。

その通りにして、夜が明けてから糸をたどって北の堀の下に行くと、針は大きなミミズの腰に刺さっていた。その



後、身籠もつて一人の息子を生んだ。十五才になると、みづから甄萱と名乗った。これが百済の王となり四十三年国を治めた、というお話です。

ところがこのお話は、甄萱が最初かというところ、日本でも「薯童謡」というドラマをやっていました、あの有名なお話です。

『薯童謡』で有名な「三国遺事」巻二「紀異 武王」条には、武王の出生について「武王名璋。母寡居、築室於京師南池邊、池竜交通而生」ということで、百済の武王（武康王）の母は池の竜と交流して生まれたという「忠南扶余の南池伝説」が現在あり、それは民間伝説集の中にもとられています。その民間伝説集の中では、百済の武王の出生は三輪山型伝説が伝えられています（崔常寿『韓国民間伝説集』（通文館、一九五八年）二三頁）。後百済の甄萱の出生もやはり武王伝説を借用してつくられたのではないかという説があります。

次はそれぞれの書物の主人公一覧で、二三ページに行くと、今度は『三国遺事』を見て、なぜ池の竜がミミズになるのかということとを解明した「武康王伝説の研究」という百済史研究に載っていた論文があります（史在東「武康王伝説の研究」『百済史研究第六輯（一九七五年）』）。池の龍は지렁이(チリョンイ)で、ミミズは지렁이(チリョンイ)ですから、発音はどこが違うかというと、池の龍の ryong、ミミズの

gim と真ん中のところが違うだけで発音は非常に似ています。池の龍をミミズに変えたのは、甄萱は後百済を建国しましたが、四三年間で国を滅ぼしてしまつた、あまり評判のいい人ではないわけです。それなので、悪名高き甄萱は竜から生まれたのではなく、チリョンイをチリョンイに、ミミズに変えたのだらうという論文があります。

『新撰姓氏録』・『粟鹿大明神元記』・『古事記』・『先代旧事本紀』・『大三轮神三社鎮座次第』の糸をたどるルートを見ますと、『新撰姓氏録』や『粟鹿大明神元記』は茅渟の陶邑から三輪山まで行っています。『古事記』や『先代旧事本紀』は鉤穴を通つて茅渟の山に行き、吉野山に行き、三輪山に行くわけです。なぜ茅渟の陶邑を通らなければいけないか、という問題です。それについて、既に拙著に書きましたが『拙著「三輪山型神婚譚と須恵器」』『記紀の表記と文字表現』（おうふう、二〇一五年）』、次の文章を読みます。

「吉井巖氏は、祭祀用の須恵器の生産、流通に関わっていたが故に、ミワの称を称えた陶邑（ちやう）の神直（『新撰姓氏録』和泉国神別）が、三輪山の祭祀にかかわるようになるのは五世紀以後であろう（『吉井巖「天皇の系譜と神話二」』（塙書房、一九七六年）一九〇頁～一九六頁）と推測されている。また、考古学からも、佐々木幹雄氏に拠れば、三輪山から陶邑産須恵器が多量に出土していること、陶邑の母地

区に神直が分布していることから、五世紀前半頃から柵地区に居住していた渡来系伴造が生産した須恵器を通して三輪と関わり神直となり、そこから分化した勢力が五世紀末から六世紀初頭に三輪山に移り三輪君となったと結論づけている「佐々木幹雄『三輪と陶邑』『大神神社史』（大神神社社務所、一九七五年）・『続・三輪と陶邑』民衆史研究一四（一九七六年）」。この渡来系伴造とは、高句麗好太王の侵攻で、四〇〇年以降大量に渡来した金官伽耶人の中で伽耶式土器制作技術を持った集団であった可能性は否定できないでしょう——伽耶式土器＝須恵器であるわけです。

近年の考古学・古代史の成果からも「和泉北部地域に居住した在地の首長層を勢力下に取り込み、朝鮮半島との交通の中で招致した渡来人を配置し、須恵器生産が開始されたことは首肯されることである」「溝口優樹『氏族分布からみた初期陶邑古窯跡群』日本歴史七八四（吉川弘文館、二〇一三年九月）」ということです。

なぜ茅渟の陶邑を糸がわざと通るのかというのは、やはり須恵器の生産と関係するということです。甄萱という後百済の建国者の名前ですけれども、その名の「甄」は「陶物・陶工」の意味をあらわしています。「萱」の漢字本来の意味は「わすれぐさ」ですけれども、日本では「かや・ちがや・すすき・すげ」です。「ちがや」です。「類聚名義抄」にも「カヤ」の訓があり、茅渟の陶邑の「茅」も漢字本来

の意味で「ちがや・かや」です。甄萱という名前は、まるで茅渟の陶邑を暗示してくる不思議な名前です。

『三国遺事』は僧一然撰、甄萱の在位も十世紀初頭であり、この説話は記紀よりはるか後のことです。この三輪山型神婚譚が朝鮮半島でも「陶」と結びついていることは注意しなければなりません。後百済の話でも、甄萱の「甄」が「陶」の意味です。須恵器が多くの文物とともに半島から伝来したことは確実であり、三輪山型説話の原型も半島にあった可能性も考慮せねばなりません。とりわけ伽耶式土器とその制作方法を伝えた集団の中で伝承されていた可能性が残されることは留意されるでしょう。

『常陸国風土記』も挙げておきましたけれども、ここに傍線を引いておきました。『常陸国風土記』は誕生した子は蛇ですけれども、子を育てる容器として「杯（つき）」・「瓮（ひらか）」・「子に投げつける」盆（ひらか）」など、やはり須恵器に関係する素材が登場し、「盛りたる瓮と甕（みか）」とは今も片岡の村にあり」の語をもつて説話が終わっています。これは三輪山型神婚譚が陶邑で須恵器の生産、流通に関わっていたミワ氏に存したことは無縁ではないでしょう。

想像をたくましくすれば、その胚珠は既に伽耶式土器制作集団の中で育まれていたのではないかと考えられます。——須恵器をつくる集団たちが持ってきた神話が三輪山型



伝説であり、だから須恵器と関係する、特に『常陸国風土記』、なぜ常陸にまで三輪山型伝説があるかという、やはり小道具が須恵器であることに関係するのではないかと思います。

本来は天孫降臨神話もこの四〇〇年の高句麗好太王侵攻のときにやってきた亡命伽耶人たちが持ってきた、そして三輪山型神婚譚も須恵器制作集団、伽耶式土器制作集団が持ってきたのではないかと想像をたくましくしているところです。以上、ちょうど時間です。

(丁)